

アイ 岩手県 | 援隊だよ!

岩手県派遣隊だよ!

(「アイ援隊しずおか」より)

県民みんなで 力を合わせ 希望に向かって 一歩ずつ

がんばろう! 岩手

平成 25 年秋号

■ 片岸海岸防潮堤



○用地取得の困難

上) 片岸海岸の今 壊れた防潮堤(写真左)の陸側に仮設の耐候性大型土のう(写真右)が並ぶ

東日本大震災の津波で破壊された防潮堤などの復旧・復興事業を実施していますが、その支障となることの一つに「用地取得」が挙げられます。

静岡班が担当する釜石市片岸地区においても、①明治時代からの共有地や、②相続人に行方不明者が多数存在するなど、事業用地内に課題が山積みで用地取得が進まない状況でした。これを受け、国では、用地取得の迅速化に向け、復興庁、法務省、国交省による連携チームを立ち上げ、釜石市片岸地区をモデル地区として事務手続きの簡素化に取り組んでいます。この中で、課題①(明治時代からの41名の共有地)に対しては、土地収用の手続きを進めています。土地収用には膨大な事務手続きと長期にわたる事務処理時間が必要で、通常2年以上要しますが、事務の簡素化により1年以内での用地取得を目指しています。その第1段階として県は、土地収用の事業認定を、国に対し6/28に申請していたところ、8/19付けで事業認定が下りました。これまで約3ヶ月を要していた復興加速化措置で2ヶ月以内に短縮されました。次は県収用委員会に対し、所有者不明土地の収用裁決申請を行うこととなります。

○工事安全祈願祭が行われました。～片岸海岸 仮設防潮堤工事に着手～

片岸海岸では、10/7に災害復旧工事の安全祈願祭が行われました。今回着工した工事は、防潮堤本体の海側に仮設の防潮堤を設置する工事で、全延長470mのうち266mです。工事受注者である地元建設会社の新光建設(株)の主催で行われ、当日は、岩手県沿岸広域振興局長や釜石市長、地権者の代表者らが招かれ、工事の安全を祈願しました。祈願祭後にはマスコミの取材があり、工事概要や用地取得の状況等について次々に質問が出されるなど、関心の高さが伺えました。用地の状況は、取得予定用地5.4haのうち60%が取得済ですが、残りの用地は所有者不明などで、買収が困難な状況になっています。今後収用手続きを進め、一定の面積を確保できたところから順次、防潮堤本体の工事に着手する予定です。



上) 玉串奉納を行い工事の安全を祈願する工事担当者

○被災地ボランティア



上) 静岡からの高校生ボランティア

去る 8/22、静岡県内の高校生 34 名が被災地ボランティアの一環として、片岸海岸の清掃活動を行いました。参加した高校生は、「テレビで見ただけではなく、自分のこの目で被災地を見たかった。」と話し、猛暑の中、草刈りや砂浜の異物除去に熱心に取り組んでいました。このボランティア活動は、釜石市社会福祉協議会が主催する「B1 プロジェクト」と称し、津波で被災した砂浜を元に戻し、子供たちが再び安全に海で遊べるようにとの願いから実施している活動です。

今回のボランティア活動の結果、9/1 に「1 日限りの海の家!!」イベントが同箇所で開催され、多くの子ども達が砂浜を楽しんでいました。本当にお疲れ様でした、そしてありがとうございました。

■ 鵜住居地区防災センター ～ 被災状況と要因について

釜石市鵜住居地区には、鵜住居地区防災センターという施設があります。東日本大震災では、ここに避難した住民 244 名中 214 名が津波の犠牲となりました。

要因はいくつかありますが、防災センターという呼称が津波の際の一時避難場所でもあるとの認識を生み、避難訓練時の使用といった誤った運用により、多くの住民に誤解を与えてしまいました。例年行われている避難訓練が、参加率を上げることに注力していまい、訓練中の寒さへの苦情対策として、本来の避難場所ではなく、屋内の防災センターで訓練を実施してしまったことが、住民の誤認を生んだと反省されています。

また、防災センターは、過去の津波浸水区域内でしたが、岩手県の津波シミュレーションの浸水想定区域外にありました。シミュレーションより大きな津波が襲来する可能性があり、より高く避難するという発想ができれば、被害を抑えることができたかもしれません。

危機管理の甘さがこのような悲劇を生むことになってしまいました。

この防災センターは今年の 12/2 から解体が始まりました。



上) 釜石市鵜住居地区の地図



右上) 解体が始まる鵜住居地区防災センター
右下) 防災センターを視察する静岡県交通基盤部の視察団一行

■ 釜石港の現場見学会を行いました

9/12、マスコミ向けに、釜石港の現場見学会を開催し、工事の進捗状況等を説明しました。

地元のテレビ局やラジオ局、新聞社から取材の申込みがあり、復興が進んでいる様子や、静岡県職員が復興の現場で活躍している姿を見ていただきました。工事担当の栗田主査と八木(秀)主査（防災服の2名）が説明を行いました。



左) 報道陣に工事状況を説明する栗田主査
上) 船上にて現場説明する八木(秀)主査

釜石港の復旧状況

被災直後の釜石港（平成 23 年 3 月 25 日撮影）



現在釜石港の復旧状況（平成 25 年 11 月 26 日撮影）



耐震-7.5m岸壁・野積み場
嵩上げ完了



臨港道路（東西2号線）
コンクリート舗装完了



新2号上屋完成

■ 鮭の遡上が始まりました

岩手県では、10月から12月にかけて、県内の河川に鮭が遡上し、秋の風物詩となっています。

大槌町では、大槌川支川の源水川で鮭の遡上を見ることができ、力強い生命力を感じます。なお、岩手県の鮭の漁獲量は、北海道に次いで2位です。

管内の漁協では、これからの鮭漁を主としているため、災害復旧工事においても、工事で発生する濁水・騒音・振動により鮭の遡上に支障の無いように配慮する必要があります。さらに、4月、5月には鮎漁や鮭の稚魚放流についても配慮が必要です。

当事務所では水門工事の事前準備として、水門を計画している各河川の環境調査業務を委託発注しており、騒音・振動・水質・流速を定期的に計測して、平常時の数値と工事中の数値を比較することで、鮭の遡上期間にも鮭の遡上に影響をあたえずに工事が進められるよう検討しています。

こちらでは、鮭漁は漁業従事者にとっては重要ですので、災害復旧と地域の生業とを両立するために、慎重に工事を進めていく必要があります。



左) 大槌町の大槌川支川源水川を遡上する鮭

■ 3年ぶりの釜石よいさ

9/7、釜石市の夏の風物詩「釜石よいさ」が開催されました。特設会場のほか、市中心部の大通りを、700人ももの踊り手が埋め尽くしました。「釜石よいさ」は震災後休止していましたが、震災犠牲者の鎮魂と早期復興を願って、今年から再開されることになりました。

岩手県内は秋のお祭りシーズンとなり、各地でお祭りが開催されています。ぜひ、岩手県へ遊びにきてください。



■ 仙人峠マラソン

10/27、第4回かまいし仙人峠マラソン大会が開催され、東国原衆議院議員を含む900人を超えるランナーが参加しました。静岡班からは、鈴木主査が10kmコース、根木主任が17.2kmコースに参加し、標高差400mで箱根駅伝並の勾配のある難コースにもかかわらず、2人とも無事に完走できました。マラソンを通じて、東北の復興を応援しています。



上) ゴール後の鈴木主査(中央)、根木主任(左)、右は東京都の大塚技師

平成25年度 岩手県派遣メンバー

岩手県沿岸広域振興局土木部河川港湾課復興第2グループ

主田義也、栗田貴男、八木宏晃、鈴木一弘、八木秀幸、根木健太郎